

行政視察報告書

令和6年2月4日（日）～6日（火）

社民党土浦

平岡房子

- 1 テーマ 飢肥食べあるき・町あるき事業について
- 2 視察日時 令和6年2月4日(日) 14:00~16:00
- 3 視察地 宮崎県日南市
- 4 目的
 - ・飢肥を訪れる観光客を、飢肥城内の見学にとどまらず、城下町の風情を楽しみながら由緒施設を見学しながら、地元商店の商品を味わいながらゆっくり楽しむ仕組みづくりについて学び、土浦市の観光客のさらなる呼び込みに生かす。
- 5 内容
 - ・飢肥城跡見学
 - ・飢肥城下町食べあるき・町あるき体験

6 取り組みの概要

(1) 日南市飢肥地区の概要

飢肥は、日南市中央部にある地区。飢肥城を中心とした伊東氏・飢肥藩の旧城下町である。「九州の小京都」とも称され、多くの観光客が訪れている。江戸時代初期からの地割や歴史的風致のある町並みが多く残され重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

(2) あゆみちゃんマップ「食べあるき・町あるき」について

昭和49年から飢肥地区が取り組んだのは、飢肥城の復元、重要伝統的建造物保存地区の選定、本町通り(国道222号線)の拡幅であった。

飢肥城を中心とした伝統的な街並みの復元はしたものの、観光客の多くは飢肥城内の観光が中心で、本町通り商店街に足を運ぶ観光客はほとんどいなかった。また、飢肥城下町保存会が管理していた小村寿太郎記念館を始めとする7施設のうち3施設が本町通りにあり、入館者が少ないことからその増加を図ることも大きな課題であった。

そこで、あゆみちゃんマップ「食べあるき・町あるき」を立案した。飢肥を訪れる観光客を、飢肥城内の見学にとどまらず、城下町の風情を楽しみながら由緒施設を見学しながら、地元のおいしい食べ物や手作りの商品と交換しゆっくりと楽しんでもらえる仕組みとして「あゆみちゃんマップ」を作成し、本町通り商店会へ観光客を周遊させることに成功した。

7 質疑応答と体験活動

(1) 質疑応答

感想として、入館者のほとんどが市外の方であり、小中学校の来館者が増えたということで、この取り組みが成功していることが感じられた。

(2) 体験活動

・飢肥城跡見学：周囲を飢肥杉に囲まれた閑静な場所である。広い城跡の中には小学校を始め歴史資料館、パワースポット、櫓などがある。子どもたちは登校を登城と呼んでいるそうである。

・本町通り商店街散策：江戸時代には、飢肥藩の財政を潤した飢肥杉を使った商品や地元名産の食品などを販売するお店を巡りながら施設見学も出来、楽しいひとときを過ごすことが出来た。

8 土浦市の政策に生かすには

飢肥地区と土浦市はよく似ている。土浦も古くからの城下町であり、古くからの建物や商店も現存している。土浦市も雛祭りやまちなか歩きなどの体験活動を通して土浦市に親しんでもらう取組が行われている。しかし、季節限定的なところもあり、年間を通して町歩きが楽しめる施策が望まれる。

今回体験した飢肥地区の、「あゆみちゃんマップ」を生かした、伝統的建造物や資料館などを見学しながら飢肥独自の特産物や食べ物を食べ歩き見て歩く手法は、土浦市でも取り入れて、より多くの観光客を呼び込んでみてはどうかと思った。

大いに参考にしたい。

- 1 テーマ 西都古墳まつりについて
- 2 視察日時 令和6年2月5日(月) 13:30~15:00
- 3 視察地 宮崎県西都市
- 4 目的 ・地域のシンボルでもある西都原古墳群の歴史と昔から伝わる祭りをもとに新しい祭りを創った西都市の、祭りを生かした町の活性化にむけた取り組みに学ぶ。
- 5 内容 ・西都古墳祭りについての説明
- 6 取り組みの概要

(1) 西都市の概要

西都市は宮崎県のほぼ中央に位置し、面積438.79km²、人口27,902人の都市である。市の中心部より2kmの西の大地には日本最大級の特別史跡西都原(さいとばる)古墳群が広がっている。319基にも及ぶ古墳があり、その中には陵墓参考地として指定された塚もある。

(2) 古墳まつり

この古墳まつりの原型ともいわれているのが600年以上前から始まった山稜祭である。また昭和45年頃には奉納行事を中心とした古墳祭が行われていた。昭和62年に市観光課、観光協会が呼びかけ地域の若者組織とともに西都原にふさわしい祭りを創ろうということで始まり、今年で37回目を迎えた。11月の最初の土曜日曜に行われ、今年は4万人の観客が訪れた。

1日目には産業祭や火おこしなどの体験活動があり、その夜にたいまつ行列や炎の祭典がある。2日目には奉納行事や、古代のオリンピックを想定したコフリンピックが行われ、普段立ち入れない陵墓の参拝が出来る。なかなか多様なイベントにあふれた「まつり」である。

具体的には、陵墓と目される男狭穂(おさほ)塚をニギノミコト陵、女狭穂(めさほ)塚をコノハナサクヤヒメ陵として二人の出会いから皇子の誕生までを表現している。たいまつ行列も行われ一般の方も参加できるようになっていて、約600名の参加者によって御神火が運ばれたそうだ。

しかし、課題も多く、一つはスタッフや協力団体の減少傾向が見られ、長期間同じメンバーで、中身が変わらないため、マンネリ化したり、リピーターの減少も見られるということである。二つ目は、この「まつり」が観光消費に結びついていない。三つ目が補助金頼みの運営である。そのあたりをどう解決していくかが、今後の祭り成功に繋がる。

7 質疑応答

質問：財源確保についてどう考えているか。

回答：祭りの出店者の負担金のみで、出店者が増えないので財源もそう多くない。

質問：沿道に飾る灯籠に事業所の名前を記して広告料という形で集めてはどうか。

回答：灯籠は高校生が作っているので今のところは考えていない。

質問：西都原古墳群の入場料を取ってはどうか。

回答：県や国の指定なので、それは出来ない。

8 土浦市の政策に生かすには

実際には見る事が出来なかったが、映像を見る限りでは、夜の暗がりの中で行われる古墳まつりは、勇壮であり美しい祭りに思えた。たいまつ行列や炎の祭典は幽玄である。これまでの準備は大変だっただろうと関係者の皆さんの頑張りに頭が下がる。土浦市には、キラ祭り、花火大会など全国に誇る祭りがある。協賛企業も多く経費も少なくはない。しかし、それが中心市街地の活性化に繋がっているかという今ひとつのところが思うように思う。飢肥地区の「あゆみちゃんマップ」のように、土浦ならではの街並みや商店街を巡るマップなどを作って土浦の良さをアピールし、観光消費に結びつけていきたいと思う。

- 1 テーマ 民間活力を生かしたeスポーツとIT学習について
- 2 視察日時 令和6年2月6日(火) 9:00~11:40
- 3 視察地 宮崎県児湯郡高鍋町
- 4 目的 ・オリンピック種目にもなっているeスポーツを民間活力を活用して取り組み、IT教育の推進に努めている高鍋町の取り組みに学び、土浦市のIT教育推進の参考にする。
- 5 内容 ・IT教育取り組みの説明
・コワーキングサロンVIVACAGUCCIの見学

6 取り組みの概要

(1) 高鍋町の概要

高鍋町は宮崎県のほぼ中央部海側に位置し、面積は43.80km²、人口は19,216人の小さな自治体である。しかし、国道や県道が放射状に繋がり交通の要所でもあることから、商業の一大集積地となっている。

小中学校はそれぞれ2校、県立高校2校、県立農業大学校がある。文化的遺産、観光資源も多い。

「小さくても輝く町」をスローガンに歴史と文教、城下町の再生、そして上杉鷹山の秋月家の伝統を生かしたまちづくりに取り組んでいる。

(2) 民間活力を生かしたeスポーツとIT学習

「eスポーツ(esports)」とは、「エレクトロニック・スポーツ」の略で、コンピューターゲーム、ビデオゲームを使った対戦をスポーツ競技として捉える際の名称となっている。

高鍋町では、廃業した海沿いのレストランを買い取り、改修して「コワーキングサロンVIVA CAGUCCI(ビバ・カグチ)」を作った。

この取り組みのきっかけは、企業による寄付で、この寄付は全国で4自治体にあったそうである。運営は高鍋町地域町おこし協力隊に委託している。運営資金は、企業版ふるさと納税を活用している。

サロン内にはパソコン5台が設置され、専門知識を持つ講師からオンラインにより全12回の講習を受ける

内容は、1回につきITスキル学習30分、eスポーツ練習60分を行い、対象者は町内に在学・在住の中学1年生から高校2年生までで、現在9名の子どもたちが学んでいる。課題としては、まだ始まったばかりなので、受講生も、講師の育成もこれからというところだそうだ。やがては、上記寄付のあった4自治体で交流戦を行うことを予定しているということである。

7 質疑応答

年間9~10人の受講生を今後どう生かすかと事業の拡大について質問したかったが、閉会時間が迫っていることから出来なかった。

8 土浦市の政策に生かすには

高鍋町は、小さな自治体ではあるが財政的には比較的ゆとりがあり、小さいが故に町民のニーズも掴みやすいという点があるように思える。eスポーツへの取り組みは企業版ふるさと納税という財源を生かしたもので、町の規模としては有効に使える金額なのであろう。

土浦市において同じことをやろうと思うと、少なくともこの5倍以上の費用と設備が必要となってくるので、取り組むにはもう少し時間がかかりそうに思えるし、急ぐものでもないように思える。

eスポーツは子どもたちの間では、すでに取り組みも進んでいると思う。土浦市としては、まずは、学校教育の中で、IT教育を充実させ子どもたち全体の基礎的力を高めて、その上で民間活力を生かして取り組んでいくことが良いのではないかと思った。